

本間久雄 著

日本文學全史 卷十四

續明治文學史 下卷

東京堂刊行

著者略歴

明治十九年山形縣米澤市に生る。明治四十二年、早稻田大學文學部英文科卒業、大正七年より昭和二年まで雑誌「早稻田文學」主宰。昭和三年、早稻田大學海外研究生として渡英。昭和六年、同大學文學部教授。昭和十一年『英國近世唯美主義之研究』の一書により文學博士の學位を受く。昭和三十二年、同大學、停年退職。現同大學名譽教授、並に實踐女子大學名譽教授、立正大學教授。

主なる著書

『英國近世唯美主義之研究』(東京堂)『文學概論』(同上)『文學論攷』(同上)『文學と美術』(同上)『婦人問題』(同上)『歌舞伎』(松柏社)『坪内逍遙』(同上) 其他

© 1964. 本間久雄

昭和三十九年(〇月一五日) 初版印刷
昭和三十九年(〇月二〇日) 初版發行

續明治文學史 下卷

定價 二、五〇〇圓

著者 本間久雄

發行者 東京都千代田區神田錦町三ノ五 大橋勇夫

印刷者 東京都新宿區改代町二四 田中昭三

發行所 東京都千代田區神田錦町三ノ五 株式會社 東京堂出版部

電話東京〇局八三三六
振替口座東京二七〇七

序

『續明治文學史』の中卷を世に送つたのは、昭和三十三年の三月であつた。爾來、年を閲すること六年、荏苒、今日に至つて、漸く、その下卷を公けにすることが出来た。著者は今、いさゝか肩の荷を下したやうな思ひである。

『續明治文學史』中卷の構想は、すでに讀者諸氏の知られるやうに、明治三十年代から同四十年代にかけての和歌及び新體詩を、或ひはその本質内容により、或ひはその流派によつて、それ／＼に分類し、そして、そこに、それ／＼の作家を配置し、それらの作家の生長と伸展とを、彼等の作品によつて跡づけようとしたものであつた。云はゞ所謂列傳體文學史の様式に則つたものであつた。此度の『續明治文學史』の下卷は、それとは全く構想の趣を異にしたものである。

そこには、著者の意圖したものが二つあつた。一つは一切の文學現象を、作家本位、作品本位と云ふよりも、むしろ思潮史本位に考へようとしたことである。「いかに生くべきか」についての悩みや憧れが、或る時は、さし潮となつて、「時代」そのものの浪の上に浮び出たり、或る時は、浪の底のえ知れぬ渦となつて卷き起つたりする。その場合、そのさし潮に、眞先に棹した作家は誰れか、又その作品は

何か。或ひは、その、え知れぬ渦巻を、いち早く豫知した作家は誰れか、又、それを象徴した作品は何か。——つまり、さういふ立場からの考察である。重ねて云ふが、文學的價值よりも、思想的價值に、より重點を置かうとしたのである。例へば島崎藤村を語る場合、『家』を捨てて『破戒』を採り、田山花袋を述べる場合、『田舎教師』を斥けて『蒲團』を推し、森鷗外を論ずる場合、『雁』を避けて『青年』を擧げた如きである。從來の文學史家には、恐らく殆んど問題視されなかつた作品のかず／＼、例へば小栗風葉の『豫備兵』や、小杉未醒の『戦の罪』や、小山内薫の『非戦闘員』などを、特に重要なものとして取上げたのも、如上の立場からであつた。この意味では、本書は、文學作品を素材として試みられた一種の思想側面史と云へるかも知れない。

もう一つの意圖は、本書に取上げた文學作品に對して、著者が、ウォールター・ペイターの所謂「作そのものの中の、眞實な、端的な、美的魅力」を心ゆくばかり享受し、出来るだけゆたかにそれを鑑賞したいといふ心構へを採つたといふことである。作品と作品との間を逍遙して味ひ得たる著者自らの魂の悦びとも云へよう。言葉を換へて云へば、作品そのものの齎らす文學的價値の享樂である。そして著者は、その享受し得たる魂の悦びの因つて來たる所以を作者その人の閱歴や爲人ひとなりや時代との關係において解明しようとしたのである。その意味では、少なくともこゝに取上げられた作品を本位として云ふ場合には、本書は著者の文學批評の壘積と云つてよいかも知れぬ。たゞし、おもふに、この二つの意圖乃至心構へは、文學史執筆におけるいかなる場合にも當て嵌め得るものであるにちがひないであらう。思潮史的意義の闡明と、作品そのものの價値の顯揚とは、それ／＼相俟つて、文學史の楯の兩面を形成する

不可離の要素だからである。尤も、著者は、本書において、以上二つの意圖乃至心構へを實現してゐると云つてゐるのではない。それどころか、本書が、その實現において、いかに未だしく、又、いかに程遠いものであるかは、著者自ら誰れよりも、よく知つてゐるのである。なほ、讀者への、いさゝかの婆心から、本書の構想において、もう少し具體的に述べて置くこととする。

著者は、本書を、前後の二篇に大別した。前篇（本書第六篇）の『日露戦争前後』においては、明治三十七、八年の日露戦争が、いかにして起つたか、その主戦論と反戦論とが、いかに熾烈に對立したか、といふことから出發して、戦争中、又は戦争直後、戦争そのものが、いかやうに、わが文學作品の中に取入れられてゐたかといふことに説き及び、次に、日露戦争が、戦後のわが思想界に、いかやうな影響を與へたか、又は、わが社會情勢が戦争によつていかやうな變革を受けたかといふことに論じ及んだ。エマソンは云つた。「戦争は一切組織の解體と同時にその再編成である」と。つまり本書の第六篇は、エマソンの所謂組織の解體と再編成と、そして、その間に、おのづから漂ふ時代そのものの惱みと同時に憧れとを、當時の思想界の諸傾向や、社會情勢に照し合せて、解説し論述しようとしたものである。後篇（第七篇）の『自然主義及び其以後』は上記の社會的情勢から、當然に生れざるを得ずして生れた文學諸現象の解説であり、且つ又その批評である。その中で所謂「自然主義」の取扱ひについて、著者は特に一言して置くことの必要を覺える。正宗白鳥は、その回想記『自然主義盛衰史』（昭和二十三年刊）において、「日本の自然主義文學は、世界の古今の文學史に例のない文學であつたのだ」と云つてゐる。この場合白鳥の意のあるところは別として、日本の自然主義は、少なくとも、その文學論的意義において、

茫漠として捕捉するに難く、その様相の複雑を極めてゐることに於いて、世界古今の文學史上、嘗つて類のないものであつたことはたしかである。著者は、まづ第一に、この茫漠たる日本自然主義を、文學論の立場から、その意義を限定し、そしてそれに明確な概念を與へ、同時に複雑多岐なその様相を整理しようとしたのである。そのために著者の試みた第一のことは、西洋近代の文學史における自然主義の通念を明らかにし、そしてそれと對比して、日本の自然主義を検考することであつた。かくすることによつてのみ、始めて、世界古今の文學史上、例のない日本自然主義の全貌が、明らかにされると思つたからであつた。

さういふ立場から檢考をすゝめた結果、著者は、日本の自然主義が、文學論的にも、又、實際の作品においても、自然主義ナチュラリズムと呼ばれるよりは、むしろ寫實主義リアリズムと呼ばれるのが、より至當であるといふ決論に達したのであつた。又、その或るものに至つては、少なくとも、その主張と提撕の上では、むしろ「歪曲浪漫主義」と呼ばるべきであると思はれたのであつた。それほどに、日本自然主義は、複雑怪訝なものであつたのである。ともあれ著者は本書において、從來、漠然と使用されてゐた自然主義といふ一つの言葉の中に、本質的にも方法論的にも、夫々相異つた二つの概念の含まれてゐることを認め、この二つ——自然主義と寫實主義とを明確に區別して使用することとしたのである。日本の自然主義を、世界文學史上、例のないものであると云つた正宗白鳥は、又、おなじ書の中で、斷り書を附して、それは「秀れた意味で例がない」と云つてゐるのではないと云つてゐる。たゞし、日本自然主義を、假りに、日本寫實主義と置きかへた場合、そこには「秀れた意味」での寫實主義の作品のかず／＼があつたこと

は事實である。そして著者は、その優れたものの典型の一つを、長塚節の『土』に見出し得たことに一種の悦びを感じるのである。

尤も、著者は、此度の著において、始めて自然主義と寫實主義とを區別して取扱つたのではない。それは、大正末期、イギリスの學者アーサー・マクドウォールの『寫實主義』と題する一書を讀んだ時からであつた。この書は近代ヨーロッパの文學上、藝術上から、寫實主義の本質を明らかにすると共に、それが自然主義と本質的にいかに異つたものであるかを詳論したものであつて、著者は、この書によつて、教へられるところが甚だ多かつたのである。著者は往年早稻田大學出版部から公けにした『歐洲近代文藝思潮概論』（昭和二年）と題するものにおいて、自然主義と、寫實主義とを截然と區別して論を立てたのであつたが、それはマクドウォールに教へられた結果であつた。此度の『續明治文學史』下卷は、偶々、その後の泰西の種々の文獻によつて、如上のことを一層明瞭にしたに過ぎないのである。

著者は、又、本書において、——特に自然主義を述べるにあたつて、屢々若き日の著者の文稿のわずかずを引合ひに出した。所謂自然主義は、云ふまでもなく明治末の或る時期——著者がまだ稻門の學生であつた頃である——を風靡した運動であつた。若き日の著者の如きも、眞向からその影響を受けて、自然主義を唯一絶對の文學と信じた一人であつた。著者が、學窓を出るや否や、自然主義の一末流として筆を採つた文稿の殆んどすべては、上記の信念からのものであつた。従つて今日、改めて當時の自然主義を語るに當り、著者は、若き日の謬解と偏執とを是正するの必要に屢々迫られたのである。著者往年の文稿の引用は、そのためであつた。當時の自然主義の合言葉の一つであつた「懷疑と告白」を、い

ささか、もぢつて云へば、それは、著者に取つての「懺悔と告白」に外ならないのである。事實、今日の著者は、自然主義當時の暗鬱落寞たる「灰色の世界」を、はるか昔に通り越してゐるのである。そのことは、著者の古稀記念として公けにした『自然主義及び其以後』（昭和三十二年東京堂刊）の自序に委曲を盡してあるから、こゝでは省く。

著者は、本書の構想にあたつて、上記のマクドウォールを始め、ヘヴロック・エリスやホルブルック・ジャックソンやフェルディナンド・ブリュンティエールやジョン・ファーマン・コオア其他泰西の諸學者に非常に多くを負うてゐる。近代の日本、特に日露戦争後の日本が、西歐との接觸を愈々密にするにつれて、日本の文學も亦、西歐文學との交渉と關係とを、愈々深くすることとなつた。従つて、近代日本の文學——特に自然主義及び其以後のわが文學も、その正しき理解と鑑賞のためには、云ふまでもなく、當然に西歐文學に對する吾々の認識と、吾々の比較檢考上の知識とを深くすることが必要である。上記泰西諸學者は、この點において、重ねて云ふが、著者を益すること極めて多かつたのである。又、既刊四卷を含めて『明治文學史』を草する上の著者の具體的な用意と態度とについては、前『續明治文學史』中卷所收の「あとがき」（『明治文學研究の態度及び方法について』）の一篇を一讀されることを希望する。

なほ、一言して置きたいことは、當然に重要項目の一として取上ぐべき筈の『俳句』について本書は何等觸れるところがなかつたといふことである。「俳句」といふ文學形態は、云ふまでもなく、日本獨自のものであり、それだけにその理解と鑑賞とには、特別の準備と用意とが必要な筈である。著者は、

その準備と用意とにおいて未だしきもののあるを自ら知つてゐる。本書に『俳句』についての項を缺かざるを得なかつた理由はそこにあつた。讀者諸氏の諒察を得ば幸ひである。

著者は、本書下巻の執筆にあたつて、既刊四巻の時とおなじく、早稻田大學圖書館、同演劇博物館、東京大學明治新聞雜誌文庫に負ふこと最も大きかつた。又、多くの知友からの好意あるかず／＼の協力を受けた。特に、上記明治新聞雜誌文庫の西田長壽氏が、研究資料採採についての便益を與へられたこと、木村毅氏が、著者が永い間探し求めて得ることの出来なかつたトルストイの日露戦争反對についての原文所収の書籍を貸與されたこと、黒田湖山の息同直竹氏が、湖山宛永井荷風の書簡を著者に贈られたこと、高津春繁氏が種々の助言を惜しまれなかつたこと、又、上記の西田氏を始め、石丸梧平氏、與謝野光氏、三上正壽氏、星川長七氏、新井寛司氏、永田清一氏、井村君江氏等が、本書に引合ひに出した人々の生歿年について、著者に教示されたり或ひは探索斡旋の勞を採られたりしたことなどいづれも著者の感謝して措かぬところである。

本書の校合並びに『索引』の作成は、前中巻の場合とおなじく、岡保生氏を煩はしたのである。所謂歴史的假名遣ひ、所謂正漢字についての正確を期し得たのも一に同氏の賜物である。同氏が教職にある繁忙な身にもかゝはらず、その勞を厭はれなかつたのはこれ亦著者の深く感謝するところである。

終りに臨み、著者は、東東堂の、今は亡き前社長の大野孫平氏、並びに現社長の大橋勇夫氏に對し、又『明治文學史』の第一巻以來、今日まで、永い間にわたつての拙著刊行上、いつも何くれとなく斡旋

の勞を採られた東京堂出版部長増山新一氏並びに同部赤坂長明氏に對して、改めて心からの謝意を表したいと思ふのである。

昭和三十九年九月

著 者 識

本書『續明治文學史』下卷の篇章は、前中卷の後を承けたものである。

本書の引用文は、既刊四卷の場合とおなじく、假名遣ひ、句讀法、送り假名、當て字、圈點等、出来るだけ原型のまゝにして置いた。個々の作家の筆癖や、その時代の用語用字上の習慣等をそれによつてそのまゝに窺ひ得ると思つたからである。たゞし、讀者の便をはかつて、句讀點については、多少、稿者の手心を加へたものもある。

本書引用の著書名、作品名、論説の題名には、既刊四卷の場合とおなじく『』を、又、新聞、雜誌には「」を附して、それ々々を區別して置いた。本書人名の生歿年は、既刊四卷所出のものは省くことにしたが、讀者への婆心から、重複を厭はず、記載したものもある。

目次

興隆期 續篇第三

第六篇 日露戦争前後.....一

第一章 戦争是非.....一

第一節 開戦論と非戦論.....一

(イ) 所謂「七博士建言」.....一

(ロ) 反戦論三種.....五

(ハ) 木下尚江『火の柱』.....九

第二節 日露戦争とトルストイ.....四

(イ) トルストイと「平民社」.....四

(ロ) トルストイ非戦論是非.....八

(ハ) トルストイ再認識.....二

第二章 日露戦争と文學.....六

第一節 所謂戦争文學.....六

(イ) 戦争禮讃……………二六

(ロ) 警告……………二七

第二節 小栗風葉作『豫備兵』問題……………二八

(イ) 『豫備兵』の上演……………二九

(ロ) 愛國心の問題……………三〇

第三節 戦争否定の文學……………三一

(イ) 與謝野晶子と大塚楠緒子……………三二

(ロ) 女性と平和問題……………三三

(ハ) 小山内薫『非戦闘員』……………三四

(ニ) 小杉未醒『戦の罪』……………三五

第四節 戦争主題の文學……………三六

(イ) 異常心理を描ける作品……………三七

——藤村と泡鳴と花袋と——

(ロ) 花袋の『一兵卒』……………三八

第五節 鷗外の『うた日記』と露伴の『心のあと』……………三九

(イ) 『うた日記』鑑賞……………四〇

(ロ) 露伴と龍溪と……………四一

第六節 戦線記録（ルポルタージュ）	三
-------------------	---

(イ) 櫻井忠温の『肉弾』	三
---------------	---

(ロ) 『寄生木』と『血汗』	六
----------------	---

第三章 戦後の思想問題	四
-------------	---

第一節 傳統文化と外來文化	四
---------------	---

(イ) 「世界的日本人」	四
--------------	---

(ロ) 逍遙の『新樂劇論』と『新浦島』	九
---------------------	---

第二節 社會主義の分化	一〇
-------------	----

(イ) 「平民社」の解散	一〇
--------------	----

(ロ) 堺枯川	一八
---------	----

第三節 「いかに生くべきか」	二三
----------------	----

(イ) 時代の「迷兒」	二三
-------------	----

(ロ) 蘆花の『勝利の悲哀』	三三
----------------	----

(ハ) 蘆花改宗	三六
----------	----

第四節 個人主義	三九
----------	----

(イ) 登張竹風とニイチエ	三九
---------------	----

(ロ) イブセン移入	四二
------------	----

(ハ)	個人主義對社會主義	一四
-----	-----------	----

第五節	所謂「世紀末」	一五
-----	---------	----

(イ)	虛無思想	一五
-----	------	----

(ロ)	「世紀末」語義問題	一五
-----	-----------	----

(ハ)	「世界苦」と「頹廢」	一五
-----	------------	----

第七篇	自然主義及び其以後	一六
-----	-----------	----

第一章	所謂自然主義	一六
-----	--------	----

第一節	運動としての自然主義	一六
-----	------------	----

(イ)	文壇の「日の出前」	一六
-----	-----------	----

(ロ)	リアリズムとナチュラリズム	一六
-----	---------------	----

(ハ)	科學と文學	一七
-----	-------	----

第二章	前期自然主義	一七
-----	--------	----

第一節	ゾラ移入考	一七
-----	-------	----

(イ)	美妙と鷗外	一八
-----	-------	----

(ロ)	蘆花・紅葉・魯庵・梶井	一八
-----	-------------	----

第二節 小杉天外	一六九
----------	-----

(イ) 『はやり唄』以前	一六九
--------------	-----

(ロ) 歪曲ゾライズム	一七二
-------------	-----

第三節 永井荷風	一七五
----------	-----

(イ) 「胎生 ^{エンブリー} ゾラ」	一七五
------------------------------	-----

(ロ) 『地獄の花』の問題	一七九
---------------	-----

(ハ) ゾライズムかニイチェズムか	一八五
-------------------	-----

第三章 後期自然主義

第一節 人生觀上の特色	二二三
-------------	-----

(イ) 「現實」とは何ぞや	二二三
---------------	-----

(ロ) 幻滅・懷疑	二二八
-----------	-----

(ハ) 偶像破壊・未解決	二三三
--------------	-----

第二節 材料拮据上の特色	二三七
--------------	-----

(イ) 「無念無想」	二三七
------------	-----

(ロ) 「没個性」	二四九
-----------	-----

第三節 目的觀上の特色	二五三
-------------	-----

(イ) 虚無	二五三
--------	-----

(ハ)(ロ)	觀照	三三
(ハ)	創造	三七

第四節	自然主義是非	四〇
-----	--------	----

(イ)	反感・誤解	四〇
-----	-------	----

(ロ)	理論(一)	四六
-----	-------	----

(ハ)	理論(二)	四六
-----	-------	----

第五節	日本自然主義の史的位相	四六
-----	-------------	----

第四章 所謂自然派の作品

第一節	島崎藤村	五九
-----	------	----

(イ)	『破戒』の出現	五九
-----	---------	----

(ロ)	『破戒』梗概	六二
-----	--------	----

(ハ)	『破戒』の特色	六〇
-----	---------	----

- (一) 生活問題 (二) 所謂無戀愛
- (三) 「世界苦」と「地方色」 (四) 契機問題

第二節	國木田獨步	七〇
-----	-------	----

(イ)	『獨步集』と『運命』と	七〇
-----	-------------	----

(ロ)	獨步作品の特色	七六
-----	---------	----